

# 琉球大学学術リポジトリ

## 本土の貿易自由化と沖縄の農業

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福仲, 憲, Fukunaka, Ken メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20618">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20618</a>

鱗片は母球の一番外側の一列は病害を被っている恐れがあり、貯蔵養分も少ないので取り除き、その次の層から用いる。また繁殖を目的として栽培する場合には、木子や母球の充実を図るため、蕾はなるべく早くつみとることが必要である。

スイセンなどはある年代栽培された時容易に分離繁殖することができる。グラジオラスは品種によって新球根の下面に多数の豆粒状の小球ができ、一方母球から生ずる芽の発生の旺盛なものは分球が多く、この両方で繁殖される。小球は木子と呼ばれ、種類と栽培法によって著しく異なり、少ないもので3~4球、多いもので300~400球も着くものである。これを上手に播けば急速に増殖することができる。その上、この木子の中には春播いて夏から秋に開花するものが相当多く、これらは切花として高価に販売できることもある。また球茎は発根部分と発芽すべき芽の部分をつけて鋭利な小刀で分離するとき、完全な分球繁殖ができる。

## 2. 分株繁殖

普通、株分け、芽分け、根分けと呼ばれ、灌木類や宿根草の繁殖に用いられ最も簡単な方法である。

ガーベラは肥沃な土壌では1年に10数芽発生し、よく開花する。3年目になると株が大きくなりすぎ、花芽の着生が不良となるゆえ、一株3~5芽とし秋から春にかけて株分けする。株分けには鋭利な鎌や長い庖丁などで芽を傷つけないよう短縮茎を切る。新たに植付ける場合には根と葉を半分位に切って深植えしないようにする。切花を主とする営利栽培では、鋏で一芽一株に分けたものを株間30cm、条間30~60cmに植える。

キクの株分けは栽培の目的、種類などによって異なるが、圃場において大量生産の切花栽培、懸崖菊の栽培、確実に繁殖しようとする場合に行なわれる。相当大株を養成するためには秋しよう花後、その根本から幾分遠ざかった部分に発生した短大の充実した根茎を用いる。普通栽培では3、4月が適しているが、キクには秋菊、寒菊、夏菊など各種品種、系統が多く、また日長処理（電燈と暗幕を用いる）により周年切花として出荷されるので、株分けの時期もそれにより考慮されなければならぬ。

その他、アンソリウム、アスパラガス、ラン類、パンダナス、クンシラン、カラジウム、カンナ、イチハツ、ジンジャ、カラー、スイレン、オモト、シユロチク、カンノンチクなども株分繁殖が行なわれる。これら宿根草の株分けの時期は一般に地上部が枯れるか生育が殆ど止って後から早春の発芽期直前までの間に行なわれるが、

初冬に株分けを行うと翌年の開花、生育には良い結果をもたらす場合が多い。（つづく）（友寄長重）

## 訂 正

1963年1月号(No.86)3ページ第1表 1.3.407.59→340.795  
3ページ左下12行34.00→340.00 4ページ右下1行国産→  
外国産 以上おわびして訂正します。